神戸新聞社　令和4年6月26日(日)　朝刊

カルテ Q&A KARTE

５、６年前から視力が低下し、最近目の充血や目の奥に違和感があり、眼科を受診しました。「フックス角膜変性症」と診断され、治療法は角膜移植しかないと言われました。現在は普通に生活できていますが、これからどうなるか不安です。（57歳、女性）

角膜移植

椋野洋和医師

白内障手術も視野に治療方針を

目はカメラに例えられることが多いです。レンズに当たるのが角膜と水晶体で、フィルムに当たるのが網膜です。レンズの大切な特性は二つあります。一つは光を集めるためきれいなカーブを描いていること、もう一つは光を通過させるために透明であることです。

裏を返せば、この特性が失われる状態では治療が必要です。角膜が透明であるためには角膜内の水分量が一定に保たれる必要があり、この働きを担っているのが角膜内皮細胞です。「フックス角膜変性症」は角膜内皮細胞が少しずつ減る病気です。

通常1㍉平方㍍あたり2千～3千（個）とされる角膜内皮細胞密度が500未満まで減ると、角膜のほとんどの容積を占める「実質」がむくみ、その程度に応じて視力が低下します。これが「水疱（すいほう）性角膜症」といわれる状態です。進行すると「角膜上皮」もむくんで痛みの原因となります。「水疱性角膜症」になれば、今の時点で角膜移植以外に有効な治療法はありません。角膜の透明性がある程度残っているときは角膜内皮移植、全体の混濁が強くなったときには全層角膜移植が選択されることが多いです。

フックス角膜変性症は比較的緩やかに進みますので、単独で角膜移植が必要な段階まで進行することはあまり多くはありません。ただし、角膜内皮細胞密度が500以上千未満であれば白内障手術などによる、わずかな刺激が引き金となって水疱性角膜症に至る危険性があるといわれています。

相談の方の場合、視力の低下がひどくないならおそらく現時点では、角膜の透明性は維持できているものの、57歳という年齢を考えると、角膜移植のみならず、白内障手術も視野に入れた治療方針を立てる必要があるということになります。

（兵庫県眼科医会、椋野洋和＝神戸市長田区、新長田眼科病院）